学 会 名	第32回日本慢性期医療学会 （2024年11月14日～15日）
研究テーマ	脳梗塞後の不穏状態からの回復、自宅退院を実現できた一事例 ～ご家族の意思決定を尊重して～
病 院 名	医療法人喬成会 花川病院
演　　者	○堀口祐子（看護師） 澤田敦子（看護師）

概　　要

【はじめに】
患者は脳梗塞、頸動脈内膜剥離術後から不穏状態が続き、当院転院後もリハビリの介入が困難、精神科転院も検討されていた。自宅退院は困難と思われたがご家族の強い意思を尊重し自宅退院をチームで支援、現在も在宅生活が継続されている一事例を報告する。
【事例紹介】
患者：T氏　83歳　男性
病名：脳梗塞　高次脳機能障害
入院期間：令和X年9月～令和X年12月
背景：令和X年8月脳梗塞発症、妻と2人暮らし、妻は無症状の末期肺がん、介護経験なし、市内に住む次女のサポートあり
認知症高齢者日常生活自立度Ⅳ　介護度4
明らかな麻痺はないが見当識障害、記憶力低下、認知機能低下が強く弱視であり不安と混乱が著明であった。
【経過】
落ち着かず大声をだすT氏に、すぐに支援ができるよう居場所の設定、食事は食べたいタイミングで嗜好品を提供した。ご家族の名前を叫んでいることが多く、できるだけ面会できるように配慮した。徐々に環境に適応し出来ることは増えたが、認知機能低下により、目が離せない状況は変わりなく、自宅退院は困難と思われた。しかしご家族の「大変でも連れて帰りたい」という意思は変わらず、リハビリスタッフと連携し指導の実施、訪問サービスの調整を行い自宅退院を実現した。
【結果・考察】
入院時は不穏が強く入院の継続は困難と思われた。T氏にとっての最善を、チームで考え、精神科への転院ではなく環境適応の配慮を行い、落ち着きを取り戻すことができた。
持病のある妻と2人暮らしという背景もあり、自宅退院は困難と思われた。しかしご家族の強い意思と愛情に周囲は動かされ、予測以上のADL向上を果たし自宅退院を実現した。
患者の方向性は医療者側の尺度で決めつけず、必要な情報を提供した上で、患者、家族の意思検定を尊重し、できる限りの支援をすることが私たちの役割と考える。